

## 特集：差別・排除・貧困に教育学はどう向き合ってきたか

世界は今、新たな分断社会へと急速に歩みを進めているかのようである。目まぐるしく飛び込んでくるニュースには、人種・民族・宗教を理由とする排他的な主張や、他者との対立をあおるかのような過激な物言いがあふれている。日本においても、ヘイトスピーチや生活保護受給者へのバッシング、障がいを持つ人びとの存在の否定といった出来事が報道され、対話よりも攻撃が、相互理解よりも無関心が人びとの中に広がっているようにも見える。

分断を加速させるかのようなこうした状況を目の当たりにしながら、教育学が、今、あらためて考えるべき問いとはいかなるものであろうか。本特集は、「今、あらためて考えるべき問い」の検討のために、教育実践および教育学の歴史的蓄積を現代的な視点から検証することを提起するものである。ここで歴史的な視点からのアプローチを提案するのは、現在、貧困問題や社会的排除に取り組む研究の広がりの中であって、これまでの試行錯誤や様々な議論、理論的な到達点や残された課題を再考することが、問題把握や研究課題の設定に不可欠だと考えるからである。

例えば、日本では、2008年頃より「子どもの貧困」に対する社会的関心が高まり、2013年には「子どもの貧困対策の推進に関する法律」（2014年、施行）が成立、その後、各地方公共団体で対策計画の策定が進行している。教育学の諸領域でも研究テーマとして掲げられる機会が増え、学校現場での取り組みも促されつつある。しかし、「子どもの貧困」への社会的関心・政策・研究・実践は初めて登場したわけではない。「浮浪児」「長欠児童」は、かつて大きな社会問題とされ、学校・地域・職場など各所でその問題解決が模索されてきた。教師たちの中からは、児童・生徒の生活を理解し支えることと教室での教育とを一体としてとらえる実践への志向が生まれ、生活と教育との結合をめぐる議論が重ねられてきた。学校外でも、地域での相互扶助、自治体独自の施策・事業、学生セツルメントなどの社会活動が展開され、それらと連動して社会科学の研究も進展してきた。

また、部落差別・同和問題、民族差別、性差別、障がい者差別といった具体的な問題と向き合うなかから、教育の思想や実践の理論が提起され、問い直された。こうした動向はもちろん日本に限定されない。アジア、アフリカ、ラテンアメリカなど「第三世界」からの発信や、人種差別、宗教をめぐる争い、難民・移民問題と直面した欧米における経験の蓄積は、教育学に絶えざる革新を迫ってきた。

現代の差別・排除・貧困には21世紀という時代が刻印されており、歴史に学ぶことのみでこれら問題の直接的な処方箋を得ることができるわけではない。それどころか、現状と照らし合わせて見る時、むしろこれまでの実践や研究の限界や問題点がくっきりと浮かび上がることになるかもしれない。にもかかわらず、いやだからこそ、教育学がその歴史の中で

差別・排除・貧困にどのように向き合ってきたのかを真摯に振り返ることこそが必要である。部落差別や同和問題に取り組む理論や実践が現代の貧困や排除への抵抗を支える場面はないのか。あるいは、外国人問題の理論枠組は、移民をめぐる現代的な状況に対しても有効と言えるか。現在と過去をつなぐ試みは、現代の課題の特質と過去から変わらぬ本質を明らかにする挑戦である。これらの再考こそが、直面する現代的な問題の解決のために意味ある示唆を与えてくれるのではないだろうか。

<考えられる投稿テーマ例>

- (1) 貧困問題、同和教育・解放教育、民族教育、フェミニズム教育の実践や理論の歴史的検証
- (2) 障がい児・者教育、インクルーシブ教育に関する国内外の蓄積の整理や、現代的課題の検討
- (3) 拡大する移民・難民問題に対する多文化教育の変容
- (4) 平和・人権教育、生活綴方教育・生活教育、生活指導実践等に関する教育実践の現代的含意
- (5) 海外の教育実践の文脈からの考察
- (6) 教育思想・理論からの差別・排除・貧困に関する歴史的考察
- (7) 社会教育における差別・排除・貧困に対する実践の意義

締切：2018年7月31日（火） 必着

送付先：日本教育学会機関誌編集委員会

〒101-0041 東京都千代田区神田須田町2-15-2 クレアール神田102

\* 投稿にあたっては、最新の「投稿要領」を参照のうえ、封筒の表に「特集：差別・排除・貧困に教育学はどう向き合ってきたか」と朱書きすること。